

銀

賞

『青い氷の結晶』

青い氷の結晶

千葉県 市川高等学校一年 十川理世

レモン色の太陽の真下にある真っ白な雪山。その高い山の頂上には木でできた小さな小屋がぽつんとある。少しヒンジが入っていてもろそうだが、小さくてかわいい。

そう、その小屋だ。その小屋で、おじいさんは一人で暮らししている。

真っ白な髪に淡い青色の瞳。メタルフレームのオーバル型のメガネ。そんなおじいさんは薬屋だ。山の麓ふもとにある街に住んでいる人たちのために、毎日薬を作っている。風邪薬、塗り薬、咳止め。山で取れる薬草からいろいろな薬を作っている。

あまりにも薬がよく効くため、おじいさんは街のみんなから山の「魔法使いさん」と呼ばれている。

「おばあちゃんの腰が悪くなっちゃったの。魔法使いさん、塗り薬ちょーだいー。」

「魔法使いさん、最近」の子がどうにも咳が止まらないくて。良い咳止め、もうえないかしら?」街のみんなはそうおじいさんを呼び、薬を買っては次の日に小屋に戻り、

「効いたよー。ありがとう」と、おじいさんに笑顔で言つ。

だが、おじいさんはただの素晴らしい薬屋ではない。本物の魔法使いだ。魔法使い、とは言つても、籠^{はなわ}に乗つて空を飛んだり、杖^{つえ}を使って魔法を使つたりする)ことはない。おじいさんの魔法は水と植物の魔法だ。道具なんて必要ない。

そんなおじいさんの趣味は、人々の幸せな思い出を雪に閉じ込める)こと。街の人々の幸せな思い出を淡い青色の雪に閉じ込め、見たい時に見られるとこにしている。街のみんなが薬を買いに来ない時は、その雪の中に閉じ込めた温かい思い出を見て幸せに過ごしてしまる。

おじいさんはずっと一人暮らしした。しかし、ずっとみんなと繋がつてこなから一度も寂しいと感じたことはない。

ある朝。おじいさんの家の付近を今までにない吹雪が襲う。大雪と強風のせいで山の頂上^{しゆうじょう}にある薬屋に街のみんなは来ることができない。悲しいことに、吹雪はそう簡単には止まず、おじいさんが街のみんなと会えない日は長い間続く。

やる)ことがないおじいさんは部屋の角にある、古い木の戸棚を開ける。中にはたくさんの緑色の植物が綺麗に並べられてる。おじいさんは一番手前の植物を見る。そして、もふもふとした葉っぱに乗る小さな雪を指先で触れる。

すると、小さな雪は宙に浮かぶ。宙に浮かんだまま、どんどん大きくなつてしまく。おじいさんはその雪を優しい眼差し^{まなざし}で見てる。淡い青色の雪はお皿ほどの大きさになつてから、じやなり止まる。

パーン、と音を鳴らして弾ける。弾けた雫の粒が丸く弧を描き、田になる。田の中をおじいさんは淡い青色の瞳でじーっと見つめる。

すると、田の中から赤ちゃんの幼い笑い声が聞こえる。幸せそうな笑い声のボリュームが段々と大きくなり、おじいさんの耳元に響く。と同時に、粒の田の中に「一二一」と嬉しそうに笑う赤ちゃんの愛らしい顔が映る。「魔法使いさんのお陰でこんなに元気になりましたよ。本当にありがとうございました」とうなずく。

優しく赤ちゃんを抱きながら、おじいさんに向かって母親は言ひ。そしてにっこりと微笑む。

おじいさんはそんな母親の笑顔を見て思つ。あの赤ちゃんも今はもう立派な男の子だ。皮でできたリュックを背負つて、学校に通つている。スポーツにも励んでいるそうだ。

スースと粒が元の雫に戻る。ポタツ、と音がして雫が元の葉っぱの上の位置に戻る。

おじいさんは無い出を片つ端から見ていく。

抱き合つて泣く母子。
撫なでられている犬。

車からの家族に向かつて手を振る父。

おじいさんは見ている間、ずっと幸せだ。

雪山をはしゃぎながら滑る男の子。
すべ

輪になつて雪だるまを作る子供たち。

ほっぺを赤くしてワッキーを食べる女の子。

だが、何口も呑てふると、おじいちゃんは思つ。みんなに会いたい。私はすうとひとりぼっちだ。今、街のみんなは何をしてるのだろう。気にな。

吹雪が強くなる。寒い風がヒューッと吹き、ヒビの入った木の窓を叩く。ガタガタッと窓が音を立てる。雪もやけに積もる。一のままでは一の先もしひかへ外は歩けないだろう。

肌を刺すような冷たい床がおじいさんのしわしわの足の温もりを徐々に奪つ。冷え込んだ空気がおじいさんの首をひんやりとやせらる。

風がドアを叩いたびに心が叩かれたように、おじいさんは寂しくなる。

みんなに会いたい。街のみんなはどうしているのだろう。

あの犬は今、幸せに吠えているのだろうか。

あの女の子はあの男の子と仲良くなれただろうか。

あのお母さんは無事に赤ちゃんを産むことができただろうか。

みんなに会いたい。街のみんなは今どうしているのだろ。

凍えるような寒さの中、おじいさんは扉へ向かう。小屋の外に出で、^{あいじゅ}藍色の空を見上げる。白い、弱々しい手を、冷たい空気をふり切りながら前に出す。

街のみんなは大丈夫だろ。

私のことが心配だろ。

私に会いたがつているだろ。

おじいさんはそつと、^{はかな}儂い氷の結晶を手に受け止める。そして手をゆっくりと握る。

おじいさんはそのまま小屋に戻り、古い暖炉のそばに行く。ゆつたりと腰を下ろすと回転し、ゆっくりと手を開く。

開いた手から淡い青色の雲が浮かぶ。

水の雲には、大きなクリスマスツリーの周りに集まっている街の人々の姿が映る。みんな、^{ハロウィン}蠟燭を両手で持ちながら微笑んでいる。

楽しそうに廻りしている街の人々を見て、おじいさんは悲しくなった。

自分は魔法使いだ。だから直感でどの草が薬になるかわかつた。どの草をじのよひにして湿せれば薬になるのかわかつた。薬をどう体に取り込めば病気や怪我が治るか直感でわかつた。街のみんなはよくおじいさんを^{ほほ}いと褒めた。おじいさんはみんなから笑顔で褒められるたびに自分が物知りであることを誇りに思つた。

だが。

おじいさんは考かんえにふける。自分が誰かよくわからない。いくら薬についてはわかつていても、自分が誰なのかがわからない。ただいた。そこに。氣きづいたら自分はおじいさんで、魔法使いで。一人で住んでいた。山の頂上にある小屋に。家族がいなくて、ひとりぼっちだ。

本当に寂しかった。おじいさんにとっては街の人々が今まででは家族だった。だが街の人々はずつと遠くにいる。この吹雪が続く限り、ずっと会えない。

しかも、自分がいないのに、街のみんなは嬉しそうにクリスマスを祝っている。

おじいさんはそのまま何も食べなくなる。

集めていた思い出も見なくなる。思い出の植物が並べられた戸棚の扉が空いたまま、おじいさんはただひたすらに、椅子に座つてボーッとするようになる。

何日か経つ。太陽が沈み、月が出て、夜になる。吹雪も止んできたが、まだ風は強く、雪も降っている。おじいさんはいつも通り椅子に座つてボーッとしている。日の焦点が合わないまま、空間をじーっと見つめている。

時計の短針がカチッと音を鳴らして九時になる。おじいさんは時計を虚うつろな目で見て、ゆっくりと立ちあがる

うとする。

と、その時。

嗅いだことがないような柔らかい甘い香りが宙を舞う。
聞いたことがないような美しい歌がゆっくりと流れる。

見たことのないような薄紅色の空氣がおじいさんを柔らかく包み込む。

おじいさんはうつとりとして目を細める。

薄紅色の空氣がだんだんと白色と青色に変わっていく。

体を包み込んでいた空氣が綺麗にゅつたりと外へ流れしていく。

おじいさんはその光景の美しさに魅了され、何も考えられなくなる。

おじいさんの周りを白と青色の空氣が円を描きながら囲む。

白と青からコーンフラワーブルーの美しい氷の花が咲く。

花に見惚れていたおじいさんの目の前の空間からいきなり、キラキラ輝くダイヤモンドダストが現れる。結晶の光が反射して一点に集まり、そのアザーブルーの光の一点がだんだんと大きくなる。そして、アザーブルーの光が 花火のようにパーンと弾けて、光の花が咲く。

おじいさんは眩い閃光で思わず目を閉じる。

突然甘い匂いがなくなる。と同時に、音楽が止まる。空氣も消える。

おじいさんは驚いて、目を開ける。目を開けた途端、おじいさんはそのまま椅子にもたれて失神する。

おじいさんの田の前にはいの世のものではないと断言でやるけどの、美しいユキヒョウがいた。

コバルトブルーの瞳。

純白なもふもふの毛。

ピンクの大きな肉球。

真っ白な銀世界に現れる、神秘的で美しいものを全て集めたような容姿だ。

「お前が心配でここにきたのだ。お前が失神してどうすね」

とても澄んだ、綺麗な声でおじいさんに優しく語りかける。

おじいさんはゆっくりと田を開く。ユキヒョウの姿に圧倒され、田がユキヒョウのコバルトブルーの瞳に釘付けになる。

「お前最近何も食べていないだろう。家族がいなくて自分が誰かわからなくて寂しい、とのことだと聞いたが、本当のようだな」

そう言つてユキヒョウはおじいさんの椅子に左の前足をかけ、後ろ足で立ち上がる。そして、空いた右の前足でおじいさんの背中をやすめる。

「お前は山の精霊たちによつてここにきた。お前がここにくる前、度々街の人々に災難が降りかかるにも関わらず、彼らは病気や怪我を治す知識がなく、人口がどんどん減少していつた。私たちは精霊だが、自然を感謝してくれているこの街の人々を守りたいと考へていて。だからどんどん倒れていく優しい彼らを助けてやりたかった」
ユキヒョウはおじいさんの心臓からおじいさんの顔に視線を移す。

「お前は魔法使いだ。だから薬を扱う知識もあり、人間とも関わり合える立場だった。精霊たちはお前を「ここに寄りせば街の人々を助けることができる」と教えた。そこで私たちもお前を魔法使いの村から引っぱり出してここへ連れてきた。いろいろなところへ旅立つて、自分の任務をこなす他の魔法使いたちと違つて、お前はいつも家にこもっていろいろな薬を作つていたようだつたから」

ユキヒョウは部屋の中を見渡す。

「お前の記憶を消した理由も同じだ。私たち精霊は、お前の記憶を消さずにこの山へ送つたら、きっとお前は嫌がつて、この街の人々を助けないだらう、と」

ユキヒョウはささやく言ひ、雲が乗つてゐる生き生きとした植物が綺麗に並べられてゐる貯蔵庫を見ゆる。

「だがもう心配せなやうだ」

ユキヒョウは前足を床につける。そして何もない空氣から青い物体を取り出し、おじいさんに握らせん。

「これをおじいに置いていく。私の大切なガラスだ」

雲の形をしたガラス。上のアイスブルーが、下に行くほどに強まって「バルトブルー」に近づいく。
まさに小さな氷の洞窟、スーパーブルーだ。

「これを見ていろと辛い気持ちがスッと吸い込まれて辛くなくなるだらう?」

その通りだつた。おじいさんはその綺麗なガラスを見た途端、辛かつた気持ちが全てガラスに吸収され、辛くなくなつていて。

ユキヒョウは雪のように真っ白な尻尾を左右に動かして言ひ。

「このふの吹雪で街のみんなと会えなくなるのはまたあるかもしけない。その時のためにこれを置いていく

おじいさんはガラスのなめらかな輪郭を手でなぞるよつこして触る。一見冷たそうなガラスだが、冷たくない。とはいっても暖かくもない。本当に不思議な感覺だ。

おじいさんの淡い青色の瞳がユキヒョウの深い青色の瞳を見つめる。

ユキヒョウはじーとおじいさんの田を見返して言つ。

「先程言つた通り、お前には大事な任務がある。それを全うしや」

ユキヒョウはそう言い残し、おじいさんと背を向けた。

柔らかい甘い香りが宙を舞つ。

美しい歌がゆっくりと流れる。

薄紅色の空氣がおじいさんを柔らかく包み込む。

おじいさんはユキヒョウを見つめる。

おじいさんの視線に気付いたのか、ユキヒョウは振り返る。

「心配するな。街のみんなもお前の家族だが、私を命めた山の精靈たちも、世界各地にいる魔法使いたちも、全員お前の家族だ。お前はひとりぼっちじゃない」

その言い残した後、ユキヒョウは伸び後ろを向き、跳ぶ。

白と青になつた空氣がユキヒョウを囲み、そしてそのまま、香りと音楽と共に消えた。

残された魔法使いは顔をしわくちゃにして、嬉しそうに笑つ。